ときょう走

三年三組　勝間田　大和

白いスタートラインは、みんなにふまれてぼやけていた。大人が百人くらい、ぼくを見ていた。ゴールテープを一位で切ることをイメージした。青いTシャツを着たママがカメラをもっているのを見つけた。ミスターフリーマンがうでを空にむけると、ドーンと音がした。

カーブのところで、ビデオをとっているパパがいた。いっしょに走っている友だちがよこに見えて、ほっぺたが赤くて、ブルブルしていた。すなぼこりが目の前に来た。がんばって目を開けると、ブルーチームのはちまきをまいた男の子が、

「ガンバレ！ガンバレ！」

と言っていた。女の子がポンポンを振っていた。

ゴールテープは、下にヘビみたくクネクネに落ちていた。それをまたぐと、ぼくは三位

20 × 20

だと思った。

「ブルーチーム、四位。」

と、先生が言った。

四位のはたにならぶと、なみだが一つこぼれた。ぼうしのつばを下げて、グラウンドの草を見ていた。応えんせきのイスにもどって、おちゃのんだ。まわりに友だちがいた。

学校の中に入ると、トイレにはだれもいなかった。ぼくはシクシク泣いた。

20 × 20